

比較社会論 09年度夏学期 月2 教員：米村千代

- ・作成：09年7月
- ・本文書は手塚空の講義ノートのまとめである。シケプリにあらず。
- ・米村先生は千葉大学文学部の准教授。専門の家族史を中心に大変興味深い話を多くして下さった。甲高い笑い声や、高校が同窓だったことなど、夏学期でもっとも印象深かった講師のお一人である。

第二回 6/30 (第一回はガイダンス 手塚は出席していない)

講義題目「家族理論の展開」

1. 家族理論研究の歴史

60～70年代：家族の普遍性・普遍的家族理論の追求

80～90年代：「家族」の普遍性の否定、西洋中心主義への反省、「大きな理論（普遍性を持った理論）」の放棄

現代：普遍的な家族理論の研究は打ち捨てられ、社会・時代に応じた個別的な研究ばかり。再び大きな理論の追求が始まるか？

2. 初期の家族研究 ～大きな理論を目指して～

問い「社会の基本的 primary な単位である家族は、どのような機能を持っているのか？」

※このような考え方を機能主義という。

「社会と家族は、どのような構造を持っているのだろうか？」

※この考え方は構造主義である。

①マードック 1897~1985

- ・「家族の四機能」理論 … 性、生殖、経済、教育 →多くの反論
- ・「核家族」理論 … 夫婦と未婚の子が、家族の基礎単位である
- ・家族の類型分類
 - ・核家族
 - ・複婚家族 … 核家族の水平的延長
 - ・拡大家族 … 核家族の垂直的延長
 - ・一世代あたりの夫婦の数で、直系家族／複合家族 を区別
 - ・どこに住むかで 夫居／妻居／双居／新居／叔父居制 などを区分

②パーソンズ 1902~1979

- ・マードックの核家族理論を受け、「なぜ核家族が機能的に安定するのか」を研究
 - ※パーソンズは社会システム論で有名。社会システム論は、社会を生命体と同様に「恒常性を保ちながら変化し続ける諸要素の総体」と捉える考え方。「家族」は「社会」という大きなシステムのサブ・システムと捉えられる。

・小集団論の知見を家族に応用

※小集団論によると、数人の集団は①上下の分化②質的な分化の二つによって構造化される。①は leader と follower の分化で、②は手段的役割の担い手（集団の目的のために努力する人）と表出的役割の担い手（集団をまとめるために気苦労する人）の分化である。

・「家族の二機能」…成人のパーソナリティ安定、子供の社会化

・子どもの社会化＝子どもの認識能力発達の過程を分析

i 母子一体期

ii 母親の認識・母子の分離 ←上下の分化に相当

iii 父母の認識・兄弟の認識 ←質的な文化に相当

・結論：核家族における子どもの発達（社会化）は、小集団（もっとも身近な社会）の構造に適合している。このことが、核家族が機能的に安定する理由である。

※社会化とは…社会へ適応し、社会内での役割や位置を獲得すること。

定年退職後のおっさんは、「再社会化」の洗礼を受ける。

③マードック・パーソンズへの批判

・議論の前提は共有しつつ、修正を迫るもの

i 家族の機能の数え方（マードックは4つ、パーソンズは2つ）が適切でない
もっと多いんじゃないか？ or 少ないのでは？

ii 家族の基本構造は核家族ではなく母子関係である＝「母子ダイアッド説」

・子が母方の社会に属し、父親はどこかに消えてしまう社会がある。

・父親の頻繁な交代がみられる社会がある。

（核家族論からの再反論）・嫡出規範（父親が誰かという区別）が普遍的に存在する
ではないか。

・母系社会においても、社会的父（部族の首長など）が存在し、擬似的な核家族を作っているのだ。

iii 家族の基本構造は核家族より大きい＝「拡大家族説」

・中国の客家、イスラエルのキブツなどでは、コミュニー的な大家族が社会の基礎単位である。核家族に注目することに意味はない。

（キブツに関しては、のちに研究者自身が「キブツにも核家族があった」と報告）

・もっと徹底的な批判、2人の学説を根本から否定するもの

i 相対主義…家族の形態・機能に共通定義は存在しない。マードック・パーソンズは自文化中心主義である。

ii フェミニズム…核家族理論は男女の役割分業を正当化・固定化しようとするものだ。

④レヴィ＝ストロース

・構造主義の立場から家族を研究

- ・交叉いところ婚にかんする学説がもっとも有名…兄妹、姉弟の子ども同士の結婚が多くの社会で推奨される。外婚と女性贈与の視点から有益だからである。

※インセスト・タブー（近親婚の禁止）について

- ・あらゆる社会に何らかの形で存在する。社会秩序の根幹であるという人さえ。
- ・核家族内外に広く適用される。
- ・血縁度の高低とは必ずしも一致しなく、社会構造に影響される。
- ・そしてインセスト・タブーは破られる。
- ・パーソンズの理論によると、インセスト・タブーは核家族を安定させるために存在する。

⑤レヴィ＝ストロースへの批判

- ・構造主義では個人の自由意思がまったく無視される（人間が単純なルールに支配されている、という考え方への反発）
- ・異性愛を前提としており、同性愛を無視している。
- ・交叉いところ婚の優先は、情緒的な要因で説明できる。（「母方のいとこの方が心理的に親近観を覚えやすい。

※構築主義…構造主義への批判。メタ的な議論。「社会構造」は、研究者によって「生み出された」のではないか？さまざまな社会構造が、研究者によって自明視されていくプロセスを分析。

④まとめ

- ・マードック・パーソンズの生み出した普遍的理論は、相対主義的立場から否定されてしまった。しかし、子どもの発達などを説明した彼らの理論は、いまだ完全に乗り越えられたとはいえない。

⑤おまけ

※マードック以前の家族理論「家族進化論」…社会進化論の家族版

原始社会 → 文明社会

乱婚 → 集団婚 → 一夫多妻 → 一夫一妻

- ・空想的でイデオロギー的色彩が強い
- ・乱婚社会の存在が否定され、破綻した

1. 「家族」の近代性

①我々の「愛情に満ちた家族」という考え方が、きわめて時代拘束的・今日的なものであることが明かに。

- ・家族と情緒・愛情の関係、「家族愛」「夫婦愛」の歴史的分析
- ・「子ども」は中世以前には存在しない（アリエス）
…近代以降の学校制度などにより情愛・保護の対象として「発見」された
- ・ロマンチック・ラブ・イデオロギー（ショーター）
 - ・性＝生殖＝恋愛＝結婚（家族）が一体であるべきという意識は近代において生まれた
 - ・中世以前は、上記4つはバラバラ
- ・「家族」の境界は近代以前は不明確だった。（季節雇い人、奉公人 etc...）「プライバシー」という考えは近代の産物。



これらの学説は、「家族は感情融合に基づいた共同体である」と信じていた従来の家族論者に衝撃を与える。

②批判 …主に歴史学者から、厳密性を欠くと批判された。しかし「家族意識」という曖昧なものについて論じる以上、厳密性の確保は困難である。

- ・時代の特定が不十分である。「近代」「中世」など、曖昧な時代区分でしか語るできていない。
- ・家族史研究の中でも、論者によって説明に大きな差がある。
例)・婚外子出生率の上昇（近代西欧の一時期）の要因
 - ・ショーター…ロマンチック・ラブ・イデオロギーの成立
 - ・その他の論者…家父長制の進展（主人が奉公人に産ませるなど）
- ・「家族」成立の要因
 - ・アリエス…教育制度、宗教意識
 - ・ショーター…市場経済の成立
 - ・人口学的解釈…多産多死から少産少死への変化
- ・アリエスは上層社会（貴族→ブルジョア）についてしか論じていない。
- ・中世以前にも、「情愛溢れる家族」の証拠はたくさんある。

2. 「伝統的家族」観を疑う

- ・「大家族神話」の虚構（ラスレット）…「昔の人は早婚で子沢山。複数の世代が同居していて、家族は大人数」はうそ
 - ・昔も小家族が一般的で、必ずしも早婚ではない。

- ・非血縁者（奉公人など）を加えることで大人数に
- ・早死にするから大家族になりにくい
- ・家族の員数調整（家族計画）も普通に行われてきた…主に貧しい農民による。晩婚、授乳期間を長くする、墮胎、子殺し（間引き）など
- ・家族は固定的でなく人の出入りが激しい…出稼ぎなど
- ・離婚率・再婚率も現代と変わらない、もしくはより高い

※歴史人口学＝統計学的研究…統計資料としては、ヨーロッパでは教区簿冊、日本では宗門人別改帳を使う。…日本では濃美地方について研究が進んでいる

※1と2は一見矛盾する内容を含む…1は家族の断絶性、2は家族の連続性を強調

3. 科学史研究の成果（米村の評価）

- ・「家族」や「愛」の成立時期を議論することには、意味が無いのではないだろうか？中世以前の「家族」や「愛」も、結局は現代のまなざしで見つめられるしかないのだから。
- ・それよりも、家族に対する規範や認識（「情愛溢れる家族」「愛すべき子供たち」）が近代的なものである、ということをはっきりさせたことが重要だ。
- ・なぜなら、「家族の情愛」という文脈に、さまざまな社会的問題が隠蔽されているからである。（例えばフェミニストにとっては「男性の女性支配」）
- ・特に日本においては、近代的家族意識のたし上げは明治期の国民国家形成と密接に連動している（学校教育、良妻賢母主義、貞操観念、旧民法による家父長制）。
- ・「情愛溢れる家族」「愛すべき子供たち」という意識の深化が、どのような社会的・政治的要因と結びついているのか、ということをはっきりしていきたい。

4. 日本における家族史－資料参照

- ・明治期：近代までの儒教的イデオロギーと、情緒家族観の融合（修身教育）
 - ※儒教とは階層限定的なものではなかったか？という批判も
 - ・その後：家族国家主義の形成…家族に擬制された天皇中心の国家観
 - （日本を、天皇を父とする大きな家族とみなす）
 - ・女子教育・良妻賢母主義…二つの解釈
 - i 家族国家主義の一部とみなす
 - ii 西欧型中流規範の輸入とみなす
- ※女性に新たに与えられた社会的役割（ニンジン）、専業主婦の原型

1. 若者をめぐる言説

90年代前半：「独身貴族」「ヤングアダルト」「パラサイトシングル」

裕福な若者像、しかしその未成熟が焦点に

90後半～00年代（「失われた10年」「ロストジェネレーション」）

：「フリーター」「ニート」社会的弱者としての若者像、支援や保護の対象

2. ライフサイクルとライフコース

①移行期としての「若者」 … 『人は二つの家族を経験する』

・ 定位家族 family of orientation → 生殖家族 family of procreation への移行
その過渡期にあるのが「若者」とする

・ これは「家族」の視点から個人を捉えた「ライフサイクル」と呼ばれる考え方

・ ライフサイクル研究は、家族構成や経済的條件の周期的変動を研究する

…そのため、固定された画一的家族像を想定する。

※「総領の十五は貧乏の峠、末子の十五は栄華の峠」

②キャリア形成期としての「若者」

・ しかし、現代における人生の多様化から、ライフサイクル研究は難しくなっている。

・ そこで、「家族」で無く「個人」に着眼点がシフトされる。

・ これが「ライフコース」研究 … 個人がいつ、どのようなキャリアを重ねていくかという視点から家族を捉えていく。（発達論的アプローチ）

3. 若者とライフコース

・ ライフコースの諸要素 … ①離家、学卒、就職、結婚 ②結婚、妊娠、出産、同居

・ ①も②も、時代・環境・階層・規範によって順番はさまざまである。

・ ②のさまざまな例

i 現代日本のスタンダード 結婚→同居→妊娠→出産

ii 同棲期間がある場合 同居→結婚→妊娠→出産

iii 出来ちゃった婚 妊娠→結婚→同居→出産 など

iv 試験婚…女性が子どもを産むと正式に妻と認める婚姻形態 同居→妊娠→出産→結婚

v 通い婚…夫が統主になると同居する婚姻形態 結婚→妊娠→出産→同居

・ 未婚女性に対して「ご結婚の予定は？」と尋ね、既婚女性に対し「出産のご予定は？」と尋ねるのは、上記 i の規範意識が浸透していることを示す。

※「同居」というライフコース

①イギリスに見る家族研究

- ・イギリスでは家族と福祉、家族と貧困に関する研究が古くからある。
- ・イギリスでは新居規範が強い…「若者は一定年齢に達すれば実家を離れるべき」
…にも関わらず、親元を離れない若者が存在するのはどうしてか？
 - i 拘束モデル（危機モデル）…貧困による止むにやまれぬ同居、要支援
 - ii 選択モデル …中流家庭における、ライフコースとしての同居

②日本でも拘束モデルと同様の事態？…フリーターの若者は親同居率が高い（資料）

- ・国民生活白書では「親と同居しているからフリーターに甘んじている」と表現
…同居→経済的余裕→フリーター なのか フリーター→経済的困窮→同居 なのか
- ・不況で割りを食った若者世代（子）を、経済的に余裕のある中高年世代（親）が支援している、と捉えることもできる。（世代間の不均衡を是正するようなライフコース）

第五回 5 / 25

講義題目「教育における家族／ジェンダー」…近代的教育制度が家族・ジェンダーにどのような影響を及ぼしたのか考察する。

1. 近代教育が社会にもたらしたもの

①階層への影響

i 平等をもたらした（自由主義的教育論）

メリトクラシー（実力主義社会、学歴社会）をもたらした etc...

ii 格差をもたらした

…教育を通じて格差が再生産される、ペアレントクラシー（親の違いによる階層社会）をもたらした etc...

iii 基礎材を一般化する一方、上級材を希少化した（i と ii を総合した意見）

…高校・大学進学が容易になり、誰でもホワイトカラーを目指せるようになった。しかし、官僚などひとにぎりの上級エリート層への参入は難しくなった。

※ブルデューの「文化資本」論

・子が親から受け継ぐものは財産だけではない。言葉遣いやマナー、身体動作、趣味、教養や知的態度などの**文化資本**が、育児を通して子に伝えられ、格差・階層を再生産する。

②ジェンダーへの影響

- ・近代の「良妻賢母」主義にもとづく女子教育は、女性の家庭内での役割を固定化した。
- ・現代日本の教育に限れば、教育はジェンダー差を縮小していると言える。
 - ・男性：学歴と就職率に正の相関
 - ・女性は長らく、負の相関であった。つまり、女性の高学歴は就職に不利だった。（上級ホワイトカラー職が男性専用だったため）
 - ・しかし95年調査で初めて、大卒の女性の就職率が短大卒の女性を抜く（資料）。
 - ・女性も学歴と就労に正の相関をもつようになった。

2. 学歴と女性のライフコース

- ・現代日本における女性のライフコース
 - …①直ちに結婚・専業主婦 ②就労→結婚・専業主婦
 - ③結婚後も就労継続 ④結婚せず就労継続 ※さらに「出産後再就職」もある（※男性は③か④しかないというのがジェンダーの本質である。）
 - ・高学歴は①～④のどの場合にも有利：①②③高学歴・高収入の夫 ②③④高収入な職
- ・①～④の割合はどのように変化していて、学歴はどのように影響しているのか？
 - ・女性の学歴だけでなく、夫の学歴・職種も影響する（ので統計調査が難しい）。

- ・②か③かは、夫との収入差に影響される（かも）
- ・子どもの数は①②と③でどのように違うのだろうか？
…やはり専業主婦の方が多い、いや違いはほとんどない（資料）
- ・男女共同参画社会の理念から、近年は①②より③が称揚されてきた。
しかしここ数年、専業主婦願望が強まりを見せている（？）
…不況によって、安定した収入の男性が希少化し、従って専業主婦も希少化している。

※現代日本の結婚…概ね階層内婚（似た学歴の男女が結婚する）。

しかしやや女性の上昇婚の傾向（学歴が少し上の男性と結婚する）。

理屈からいえば、最も高学歴の女性は余ってしまう。

（多分、米村先生のジョークでしょう。結構きわどいね。）

3. 学歴の推移（資料）

- ・80年代までは、大卒が一貫して増加 … 経済成長による上昇志向
- ・90sからは、大卒50%前後で落ち着く … 低成長期の現状維持志向か？

第六回 6 / 1

講義題目「家事・育児」 …家族における重要なファクター「家事・育児」が社会とどう関わり合っているのか、ジェンダー論もからめつつ考えてみよう。

1. 女性の家事負担と伝統的ジェンダー観念

①分業規範：「男は仕事、女は家庭」…近年徐々に支持を失いつつある。

※ここ数年、支持回復傾向？（cf. 専業主婦願望の高まり）

②母親規範：「子どもが小さいうちは、母親は育児に専念すべきだ」…いまだに根強い

- ・母親の75%が「保育園に入れられる子どもは可哀そう」と解答
- ・三歳児神話「三歳までは母の手で育てないと、子の健全な発達が阻害される」
…科学的根拠はないが、（脅し文句として）かなり影響力がある
- ・近世の農村社会：若い母親は貴重な労働力→出産後すぐに出稼ぎに出たりする
…「母親規範」「三歳児神話」は近代の産物（家族史的視点）
- ・多くの女性にとって社会的ジレンマに（自己実現欲求と母親規範の板挟み）
…「働きたいが、子どものことを考えると働けない」

※主婦論争 …「専業主婦」の評価（フェミニズムによる問題提起）

（肯定派）市場経済において、家庭は唯一の金銭支配と無縁の場だ。主婦による無償の家事労働が労働者の心身をいやし、労働力を再生産するのだ。

（否定派）主婦業は奴隷労働である。女性は男性に支配されている（性支配）。賃金が支払われるべきだ。

2. 社会の変化と家事の変化 … 家事・育児の変家電の進歩で家事時間は減るのか？

①減る家事と減らない家事がある（資料）

育児 … 増加している

掃除・洗濯 … 変化なし

炊事 … 減少している

- ・炊事時間の減少分が育児に回され、女性の負担は変化していない

②（掃除機・洗濯機の進歩に反して）掃除・洗濯時間が変化していないのはなぜか

←時代による清潔感の変遷 …家電の普及が人々の清潔感を強化した？

※洗濯機論争（イギリス、洗濯機普及の初期）

- ・洗濯機を持っている家庭の方が、洗濯時間が長い
- ・階級社会のイギリス特有の問題？

- 洗濯機が買える → 中流階級 → 服をたくさん持っている
- 買えない → 労働者階級 → 服が少ない、そんなに洗濯しない
- ・夫の協力度など、幅広い視点からの検討がなされた

3. 父親の存在

…パパ・コール「母親の家事負担と心理的葛藤の軽減に、父親の有効活用を！」

- ・父親の家事の現実 …「子どもを風呂に入れる」「休日の遊び相手」
- ・家事育児願望を抱えた父親 …潜在的需要をくみ取り、父親向け育児雑誌の創刊
- ・今日の理想：「夫は家事もする、妻は仕事もする」 ※理想だけでなく経済的理由も
 - …実際は、男性は仕事に時間をとられ、女性が家事を全面的に負担
 - …結局は女性の二重負担に：「**新**性別役割分業」

→いずれにせよ、男性の働きすぎが問題。そこで…

4. ワーク・ライフバランス

- ・伝統的日本企業の社員は、家にいる時間が短すぎる。
- ・仕事の量を減らし、私生活との調和を図ろう！

①政府・企業の政策

- ・育児休業制度 …両親が共働きの場合、片方が一年間取得
 - ※企業や自治体によっては2～3年間保証の場合も
 - ※父親の取得率は、数%で横ばい
- ・父親休暇（企業が自主的に実施）…妻の出産の際に1、2週間程度
- ・クォータ（割り当て）制度の検討 …育休の一部を、父親の未取得できるようにする（北欧で実施）

②批判

- ・動機が不純。ワーク・ライフバランスや男女共同参画は方便で、実は少子化対策ではないか。
- ・北欧の一部の国をロールモデルとするのは危険。ワーク・ライフバランス的にも少子化対策的にも実効性が疑わしい。

講義題目「家族におけるコミュニケーション」 …家族内のコミュニケーションをめぐる諸問題を考える。

1. 親しい他者との関係の難しさ

①ダブル・バインド・セオリー（二重拘束理論）（ベイトソン）

…一方が矛盾した二つのメッセージ（正確にはメッセージとそれを否定するメタメッセージ）を同時に送ることで、受け手が混乱・葛藤に追い込まれる。

例）母が「こっちにおいで」と言いながら、子がすり寄ると体を引き離そうとする。

②共依存 …他者への依存と、他者からの依存への依存。逃れられない人間関係

例）・アルコール依存症患者とその家族 …患者の世話が家族にとっての生きがいになってしまう。患者の回復は難しくなる。

・DVを抱えたカップル…女性が「暴力はふるうけれど彼は私を愛している。そんな彼を、私は愛し理解してあげている」とう考えに落ち着いてしまう。結局DVは解消されず、ただれた関係が続く。

・母子癒着 …「自分に全面的に依存しているわが子」という観念が、母自身のアイデンティティとなってしまふ。

※他者に依存せずにアイデンティティを確保することは出来ないから、共依存は「程度問題」ともいえる。

③アダルト・チルドレン …子ども期のトラウマ（ネガティブな家族経験）を抱えた成人。

※定義が曖昧で、誰もがなにかしら思い当たる経験を抱えているため、一時おおいに流行した。最近はあまりはやらないようだ。

※レイン（1927~89 イギリスの精神科医）主著「狂気と家族」

・「個人に不安定をもらたすもの」としての家族を考察

・外面的（形式的）家族と、内面的（経験的）家族を区別

…その人にとって、家族がどのように認識されているか

※家族システム論 …パーソンズの提唱。第一項参照。

・「相互に関係し合う諸要素の複合体」として家族を捉える。

・家族内コミュニケーションを「恒常性維持のための手段」として分析

・家族によって異なるコミュニケーションのルールがある。

…叱り役と叱られ役の役割分担、メンバー同士の役割分担など

例）子どもの不登校で両親の不和が治る→家族が「不登校」という状況で安定したのだ

2. 家族関係の現在

- アイデンティティの視点から見た、伝統的自立モデル
 - i 絶対的な親子・家族関係（定位家族）
↓
 - ii 友人関係の獲得・家族外にアイデンティティを発見
家族の重要性は相対的に弱まっていく

- しかし現代では友人関係が希薄化し、i → ii への移行がスムーズに成り立たない（？）
- 現代社会では家族の重要性が、過去にもまして高まっているのである（？）

第八回 6 / 15

講義題目「ケアと家族」 …家族と介護の問題は、日を迫って重要化しつつある。
介護にまつわる様々な問題を、家族という視点から考える。

- ・問題意識：現代社会では、社会－家族の間の中間集団（地域社会、親戚など）が不在化している。だから、介護における家族の重要性も増している。（仮説）

1. 家族による介護

①介護をめぐる規範意識

- ・ケア規範：「子は老いた親の生活の世話をするものだ」…女性に強い（息子の嫁→実娘）
- ・不要規範：「子は老いた親を養ってやるものだ」…男性に強い（息子）
- ・同居規範：「子は老いた親と共に暮らすものだ」

- ・「おひとりさま」ブーム等、これらの規範意識は薄れてきている。
- ・高齢化社会・世代間格差等の問題で、規範が実効不可能になってきている
（現在の高齢者は潤沢な公共サービス・年金を受け、もともと余裕のある世代）

- ・娘介護の神話：「愛情と相互理解のある娘による介護が理想」
…現実には甘くない。血縁者であるが故の問題点・葛藤

②介護者の環境

- ・介護による貧困…介護のため離職・親の年金で生活→生活基盤が弱体化
- ・配偶者が介護を行う「老老介護」の問題も

2. 介護の社会化

①日本の福祉社会論

- ・「伝統的な家族介護を軸とし、それを政府が支援する」という構想
- ・批判
 - i 家族介護はもはや不可能である
… 中間集団の不在、現代における「老」の長期化
 - ii そんなにカネを出したくないのか、政府が積極的に動け
- ・介護保険制度導入(2000) … やはり家族のコミットを前提とした制度
 - ・介護施設における同居老人の冷遇（家族がいない老人を優先するのは仕方ないが…）
 - ・ヘルパー制度…マネジメントするのは家族

②介護労働

- ・介護に関わる性と身体性
 - ・“ケアは女性が” という傾向 … 現実に介護職の多くが女性

- ・「女性の被介護者は男性の介護に抵抗がある」という指摘
 - …反論：介護は肉体労働で男性に向いている、産婦人医は男性ではないか
 - ※男性の看護師・助産師についても同様の議論がなされた経緯がある

- ・介護労働の現状 … 人手不足、低賃金、長時間労働

③「感情労働」という視点

- ・A.ホックシールド『管理される心』…フライトアテンダントの職務を分析
 - ・サービス業における感情労働は、職務規定に明文化されたものではない
 - ・したがって評価されない、給与が支払われない
 - ・精神的には重圧である
 - ・感情労働は搾取ではないか？（フェミニズム的視点）
- ・P.スミス『感情労働としての介護』三井さよ『ケアの社会学』
 - ・感情労働を重要な専門職と位置づけ、肯定的評価
- ・論点
 - ・介護は感情労働化されるのか？ …物質的ケアで手いっぱいな現状
 - ・感情労働化するべきなのか？ …精神的ケアは家族により行われるべきでは？

3. 社会正義とケアの倫理 …C.ギリガンの提唱

- ・リベラリズム的正義・自由
 - ・「平等な立場で自由に個人が競争するのが正しいこと」
 - ・（ギリガンいわく）男性的価値観
- ・ケアの倫理
 - ・「正義」や「自由」が取りこぼしてしまう社会弱者への配慮
 - ・女性が持つ（べきとされる）倫理
 - ・現代社会の中では二次的なもの
 - ・今後はこれを重視していくことが社会に不可欠
- ・フェミニズムから痛烈な批判
- ・しかし、男女差という文脈を外して読めば重要な提言である。

4. まとめ

- ・介護の場においても、家族の情緒的側面と経済的側面が複雑に絡み合っている。
- ・介護を外部化できるか／できないか、した方がよいのか／よくないのかという難しい問題
- ・高齢化社会において、強い個人を前提としたリベラリズムは反省を迫られている。
（新たな公共性の模索が必要）

第九回 6 / 22

講義題目「テクノロジーと家族」…科学技術の目覚ましい発展は、家族をどこに導こうとしているのか。家族の在り方を揺さぶる深刻な問題に迫る。

0. テクノロジーの進歩と家族の変化

- ・「技術」と「家族」は相互に関連している
- ・両者の間に介在する要因は様々なものだ（以下は一例にすぎない）
- ・「規範」…新技術を家庭に導入することの是非（新技術と伝統的家族観の対立）
例）冷凍食品の使用は「手抜き」だろうか？
- ・「経済」…お金が無ければ新技術の恩恵には預かれない
（収入格差と技術の進歩は、二人三脚で家族間の格差を生み出す）
- ・「意識」…新技術・科学的知見は人々の意識を変える
例）洗濯機論争…家事用具の発明が家事を促進する？（第六講参照）

1. 生殖の技術

①出生の抑制と回避の技術

i 人工妊娠中絶を巡る問題 ～プロライフ派 vs. プロチョイス派～

- ・保守主義と自由主義の政治的対立…アメリカの二大政党が象徴的
- ・宗教問題…カトリック・プロテスタント右派は禁止求める
- ・フェミニズムの主張…中絶は女性の権利（リプロダクティブ・ライツ／ヘルス）
- ・選択的妊娠中絶（後述）は障害者への差別？

ii 出生の抑制と回避：日本における展開

- ・1948 優生保護法（49 中絶理由に「経済条項」を追加）
 - ・人口政策…戦後人口増加→子どもを減らして豊かな政策を！
（一人っ子政策と同じ発想）
 - ・政府による家族計画…表向きは避妊の普及、しかしその裏に中絶という手段が。
 - ・企業の出産指導…企業の検診や研修旅行での避妊指導
←家族ぐるみの雇用形態をとっていた日本企業の都合
 - ・ロールモデル：アメリカ中流家庭…「二人っこ主義」、三人目以降を中絶
 - ・1996 母体保護法（優生思想への反省から「看板を変えた」）
 - ・経済条項への批判…今日、中絶理由のほとんどが「経済的理由」
 - ・中絶に配偶者の同意が必要なことへの批判（フェミニズム的視点）
 - ・週数制限（現在は22週まで）に関する議論
- …早熟児の救命技術向上により、「何週から母体から独立でした人なのか」が不分明に

②生殖補助医療

- ・生殖補助医療…不妊治療、人工授精・体外受精、代理母、卵・精子の凍結保存
- ・親のヴァリエーション
 - 父親：社会的／遺伝的
 - 母親：社会的／遺伝的／妊娠・出産の母
- ・法の問題…日本で代理母出産は出来ないので、海外での出産をする
 - 親権は誰に？国籍は何に？（二国間の問題に）
- ・子の権利…精子バンク（匿名性）で生まれた子が、遺伝上の父を知る権利は保障されるか？
 - オーストラリアでは法整備へ
- ・親の権利・ドナー（代理母・精子や卵の提供者）の権利 …子の取り合い、押し付け合い
 - 例）ベビーM事件（米）…裁判では「代理母が母だが養育権は依頼者にある」と結論
- ・倫理的問題（代理母出産の是非）
 - …子宮を金で売ることが許されるのか？貧しい女性が犠牲になるのでは？
- ・代理母は第三者がいいか家族がいいか

③生命の選別

- ・着床前診断 …体外受精させた受精卵（複数）を着床させる前に、異常の有無を診断
 - 健康なものを着床させる（選択的着床）
- ・出生前診断 …子宮内の胎児の異常の有無を診断
 - 異常があった場合 22 週以前に人工妊娠中絶（**選択的中絶**）
- ・出生前診断のいろいろ
 - ・エコー検査…身体の奇形は分かる
 - ・母親の血液検査
 - ・マーカーテスト…胎児の染色体異常（つまりダウン症）の確率を算定
 - ・羊水検査…胎児の遺伝病などを確定的に判断
- ・これらの「命の選別」はどこまで許容されるのだろうか？

2. 家族観の変容

- ・実子主義 …不妊治療の進歩により「養子の里親になる」という選択肢の地位低下
- ・パーフェクトチャイルド願望 …子どもが「授かりもの」として無条件に受容される存在ではなく、「親の希望に適う限り」条件付きで受容される存在へ **計画的に設計する存在へ**

※第十回 6 / 29 講義題目「テクノロジーと家族 後編」

ノートを取っていない上、講義も良く聞いていない。発熱が続いた悪夢の一週間の前触れであった。

※第十一回 7 / 6

何を話されたか全く覚えていない。レジュメも手元にない。自主休講したのかもしれない。

※第十二回 7 / 13 最終講義

全体のまとめ。しかし一時間以上遅刻したのでほとんど聞いていない。なんということだ。

【終わりに】

- ・なんだか竜頭蛇尾と言うか、最後がしまらないプリントになってしまった。自分の精神的墮落の様子がよく分かる。参ったなあ。
- ・手塚が1学期に履修した講義のうち、本講義と深く関係するものをいくつか紹介
 1. 社会 I (市野川) … 社会学の概説。家族に焦点を絞った社会学研究の紹介である本講義と異なり、「社会」全体の中で家族がどのような位置にあるのか、その研究はどのような意味を持つのか、が分かる。
 2. 適応行動論 (長谷川) … 「家族」の生物学的理解を社会学研究にどのように取り入れるかは、研究者の今後の課題であるが、我々部外者にとっては、多面的理解を可能にする刺激的な理論と言える。
 3. 生権力論 (金森) … 「生」と「政治・権力」の関係を、フーコーらの議論をもとに解き明かす。私的な生の間である「家族」は国家によって如何に主題化されていったのか？家族史の立場からも避けて通れない問題だ。哲学の香り漂う抽象度の高い議論だが、とても貴重な視座を与えてくれる。